

ヨハネの手紙第一イントロ「いのちのことば」

1A 福音書から手紙へ

1B 受肉のキリスト

2B 「信じる」から「知っている」

3B 「言っている」から「歩む」

4B 反キリストの霊

2A キリスト者の歩み

1B 神と人との交わり 1:1-4

2B 神の命令 1:5-2:6

3B 神と兄弟への愛 2:7-3:23

4B 御霊による内証 3:24-5:12

5B 永遠のいのち 5:13-21

本文

今晚から、新しい学びのシリーズを始めます。ヨハネの手紙第一です。今日は、手紙の本文の前に、手紙についての導入部分をお話したいと思います。1章1-2節だけをお読みします。¹ **初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目を見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。² このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。」**

他の使徒たちによって書かれた手紙の多くが、どこに住む人々に宛てられたものかをはっきりさせているのに対して、そうではない手紙もあります。ユダの手紙はそうでしょう。そしてヨハネの第一の手紙は、本当にどこの誰に対して書いているのかが分からない手紙です。けれども、はっきりと具体的な諸教会があって、そこにいる人々に書いていることは分かります。

1A 福音書から手紙へ

そして、最も大きな特徴は、「ヨハネによる福音書」とのつながりです。福音書でヨハネが書き記したことがあって、その考えに基づいて、信者たちに励ましを与えていることは確かです。中身を見ると、福音書の続き、その補完であることがよく分かります。ちなみにヨハネが書いたものは、福音書にしても、三つの手紙にしても、黙示録にしても、紀元後 90 年代だと言われています。聖書全体の中で、最後に書かれた神の言葉と言えます。

私が全体を改めて読んでみて、当時あった問題が今日の教会にも多々あることに気づいています。そして、ここで警戒されている反キリストの霊、偽りの教えも今日の教会に深く関わることで

す。聖書は、パウロがテモテに話したように、教えだけでなく、教えに基づく戒め、矯正、そして義の訓練もあります。何を信じているのかを教え、それから、その教えに留まるように勧め、惑わしによって彷徨い出ることがないように警戒すべきことも書かれています。テサロニケ人への手紙を読めば、第一の手紙は教えがあり、第二の手紙に、惑わすような教えが入っているので警戒しなさいということが書いてあります。ペテロも第一の手紙は、迫害下にあるクリスチャンへの励まし書かれています。第二には、嘲る者たち、偽教師がいるから気を付けなさいという警告が書いてあります。何が正しいことなのかを教えられるだけでなく、何が間違っているのかを聞き、自分が義の中に留まっているという訓練も必要なのです。

1B 受肉のキリスト

話を福音書と第一の手紙の関係に戻します。ヨハネは、自分の伝えなかったことを前面に持って来ます。福音書において、こういう書き出しでした。「ヨハ 1:1-5 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」そして、14 節に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」とあります。

そして第一の手紙の冒頭が、同じ内容であることが分かりますでしょうか？ヨハネの話している「いのちのことば」というのは、まさに、この方にこそ永遠のいのちがあり、この方が肉体を有しているのだということを証言しているものです。この方を伝え、この方との交わりを持ち、この方にあって歩んでくださいというのが、ヨハネが手紙の読者に勧めていることです。そして、手紙のしめくりを見てみましょう。5 章 20 節後半です、「私たちは真実な方のうちに、その御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。」肉体を取られていたイエス・キリストが、まことの神であり、また永遠のいのちなのだ、ということです。この方を知りなさい、この方のうちに留まりなさい、この方の命令を守りなさい、それこそがいのちなのだ、ということをヨハネは強く言っています。

興味深いことに、手紙の最後の最後で、「5:21 子どもたち、偶像から自分を守りなさい。」と警告しています。とても変な終わり方です。イエス・キリストこそが命であられ、この方との結びつきこそが、キリスト者生活の全ての全てなのに、そうではないものを教える者たちがいて、そうではないものに引き寄せようとしているが、それは「偶像」なのだと言っているのです。キリストこそが神であるのに、この方以外に信じさせるようにしても、それは偶像なのだということです。

ヨハネの時代、いやその前から、他の使徒たちが生きていの中で、すでに流行していた偽りの教えがありました。その主なものは、律法主義に基づくユダヤ主義であり、もう一つはギリシア哲学に基づくグノーシス主義です。パウロがテモテへの第一の手紙で、こう言っています。「6:20-21

テモテよ、委ねられたものを守りなさい。そして、俗悪な無駄話や、間違っ「知識」と呼ばれている反対論を避けなさい。ある者たちはこの「知識」を持っていると主張して、信仰から外れてしまっています。恵みがあなたがたとともにありますように。」ここの「知識」というのが、「グノーシス」であります。

テモテは、パウロによって按手を受けて、聖霊を受けました。そして彼は牧会の務めに励みますが、エペソにある教会で監督をしていました。しかし、比較的若いテモテは、偽りの教えを持ち込む者たちが議論をしかけてくるので、苦しんでいました。そのテモテをパウロは励ましています。その中で、ユダヤ人の律法をあれこれいじくって、「これこれをしなければいけない」として論じて、キリスト者の信仰を何か、マニュアルをこなすような規則にがんじがらめにしようとする者たちがいました。パウロは、「1:6-7 ある人たちはこれらのものを見失い、むなしい議論に迷い込み、律法の教師でありたいと望みながら、自分の言っていることも、確信をもって主張している事柄についても理解していません。」それでパウロは福音の真理によれば、律法は罪を犯している者たちにあるのだと教えました。そしてテモテには、明白な真理にしっかり立っているように教えます。「1:15「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた。」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。」言うまでもないほど単純な真理ですが、そこから難しい議論によって、彷徨い出そうとする輩がいたのです。

そして、そういった律法主義の教えを吹っかけてくる者たちがいたと同時に、「知識を持っていることで、神に近づくことができる」とするグノーシス主義もはびこっていたのです。ギリシア思想では、霊と肉を二つに分けます。肉体の部分はすべて悪であり、そこに善が宿ることはないとしています。霊の部分、精神的な部分のよってのみ神が関わるのだということです。ですから、例えば結婚生活や夫婦の性の営みは、ユダヤ教では、「生めよ、ふえよ」という神の命令を守るものであり、聖なる行為とみなしますし、聖書的にはそうなのです。ところが、それは肉体に関わることだから、もともと悪であり、それを全て避けるか、あるいは無関係だから肉体に対しては何をしてもいい、と考えました。夫婦の間であっても性に関わることは悪であるとして、禁欲主義になるか、あるいは体に関することは関係ないことだから、精神的なこと、霊的なことだけ神に向けていけばよいのだからとして、快樂主義に陥るか、二つの極端がありました。

今でもそうではないでしょうか、カトリックでは神父は一生独身が教えられています。また、キリスト者の間でさえ、性はもともと汚らしいものとする傾向があり、ユダヤ教ほど夫婦や家族のことに積極的ではありません。その反対に、神学や聖書知識があればそのまま霊的であるかのような暗黙の了解みたいなのがあり、その人が肉体で汚れたことをしているということがよくあります。

そこで、パウロは、テモテに「健全」ということばを第一の手紙で何度となく教えています。「6:3 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと、敬虔にかたう教えに同意しない

ものがあるなら・・・」そうです、イエス・キリストの健全なこととは、敬虔にかなう教えであり、実を結ぶ類のものなのです。教えがそのまま、敬虔な生き方につながります。しかし、そうならず知識ばかりが先行し、知識があることがその人が霊的であるかどうかの「ものさし」となり、行いが伴わないということがあります。そして、そのことをむしろ推奨し、教えていくようなことをしていたら、それは「グノーシス主義」に陥っていると言ってもよいかもしれません。

今、インターネットの時代になって、その危険が大きく広がっています。以前であれば、何十年もかかって得た知識が、数秒の検索によって得ることができます。すると、その知識を得るための過程、そこにある忍耐や鍛錬であるとか、そういった過程があつてこそその知識なのに、知識を多く得たことによって、自分自身が神を知るようになったと錯覚するのです。知っていることが、自分の歩みと連動していないのに、連動していないことが見えなくなっていく。巷には、リアルな場で牧会をしていないのに、自分勝手に牧師だと自称し、ユーチューブ動画のチャンネルを運営して、それを「教会」と名付けている人たちさえいます。やっていることはバーチャルですが、そこに中身がないのです。これが、霊と肉を分ける二元論に陥った状態であります。

そして今、ヨハネが第一の手紙を書いています。彼もおそらくは、流刑されたパトモス島から戻ってきて、エペソにいたと考えられます。エペソで猛烈に流行っていたかどうかわかりませんが、同じ問題に取り組んでいました。

そしてグノーシス主義では、イエスは「肉体を取っているように見えた」というだけで、実際に肉体は取っていなかったという、仮現説を取っています。肉体は悪なので、イエスが肉体を取るはずがないとしたのです。イエス様が肉体を取っていなかったということに対抗するために、ヨハネは、事細かく、肉体を取られていたイエス様を1章1節で証言しているのです。「**私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。**」聞いただけでなく、自分の目でじっと見つめ、自分の手で触ったものと言って、確かにこの方は肉体を持っておられたことを証言し、嘘を潰していったのです。

神が肉体を取られて、私たちの間に住まわれたということ。その受肉の奥義があるからこそ、私たちの信仰が、目に見える形で、その現実の生活で、生き生きと、生々しく現れるのです。信仰が心理的状态ではなく、思想や哲学でもなく、生活そのもの、命そのものとして現れるのです。だから、インターネット礼拝というのは、リアルな礼拝を補完するかもしれませんが、取り替えることは決してできません。インターネットで事足りるのであれば、肉体をもって私たちが集まることを否定してしまうことになるのです。その礼拝されている対象は、受肉のキリストではなく、仮現のキリストに成り下がる危険があるのです。

このようにして、ヨハネの福音書においても、第一の手紙においても、「受肉のキリスト」を伝え

るべく、ヨハネは情熱を傾けています。

2B 「信じる」から「知っている」

そこで第一の手紙全体を眺めてみたいと思いますが、多く使われている言葉で「知る」とか「わかる」という言葉です。福音書では、「信じる」が多く使われていましたね。この方の名を信じる者が、神から生まれているということです。信じることの必要性を説いていましたが、第一の手紙は、「知る」という言葉を使っています。既に信じている者が、神の真理を知っているということであります。それは、グノーシス主義の知識に対抗し、「知っている」ことによって、その実が確実に現れていることを述べています。「2:4 神を知っていると言いながら、その命令を守っていない人は、偽り者であり、その人のうちに真理はありません。」これは、知識だけで神を知っていることは知っていることにならないことを明確にしています。こういった知識は偽りだと言っています。

このように警戒しながら、信者たちには励ましています。「2:21 私がこのように書いてきたのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからです。また、偽りはすべて、真理から出ていないからです。」偽教師たちは、「あなたは、まだ真理を知らないのだ」という気にさせます。真理は御子のうちにあるのに、その御子を知っていることが真の知識なのに、まだ知らないのだという気にさせるのです。だから、これこれの知識を得なければ本当には救われていないのだと惑わしてきます。しかし、ヨハネは、「あなたがたは、すでに真理を知っている。御子に留まっているのだから、知っているのだ。このようなことを書いているのは、いわゆる新たな知識を得るためではなく、すでに持っているものを知るためなのだ。」ということなのです。永遠のいのちを持っていることの保障、救いの保障を持ってほしいと願っているのです。それで、5章13節でこう言っています。「神の御子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書いたのは、永遠のいのちを持っていることを、あなたがたに分からせるためです。」

ところで、「知る」といっても、ギリシア語には二つの言葉があります。一つは、経験から知る「ギノースコウ」があります。第一の手紙だけで11回出てきます。例えば、「2:3 もし私たちが神の命令を守っているなら、それによって、自分が神を知っていることが分かります。」とあります。体験的に神を知っているということです。そして、体験していないけれども、直感的に知っているということもあります。「エイドウ」と言います。手紙の中に10回出てきます。「3:2 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」キリストが来られた時ですから将来ですが、それでもキリストに似た者になることは知っているのです。経験をしていなくとも、直感的に知っているということです。

3B 「言っている」から「歩む」

そこで、グノーシス主義という異端に対抗するために、ヨハネは、「言っている」と「歩んでいる」

ことを区別して教えていきます。「言う」という言葉をたくさん使っています。言っているだけでは真実かどうか分からない。実によって見分けができます。神を知っていると言っているだけでは、神を知っていることになりません。歩みによって、その人が言っていることが真実であることが明らかにされます。例えば、1章6節です。「もし私たちが、神と交わりがあると言いながら、闇の中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであり、真理を行っていません。」ですから、異端への警戒のみならず、私たち自身が言っていることで自分を欺くことのないように、自分の歩みを点検することができるのです。例えば、2章6節にこうあります。「神のうちにとどまっていると言う人は、自分もイエスが歩まれたように歩まなければなりません。」

今、この箇所で、「イエスが歩まれたように」とありますね。イエス様が基準となって、私たちが生きていくことを、「ように」という言葉を使ってヨハネは教えていきます。他には、「3:3 キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」イエス様につながっていること、それがいのちであるというのが、ヨハネが教えていることで、ですから、私たちの歩みの基準はいつもイエス様ご自身になるのです。

4B 反キリストの霊

そして、ヨハネは、仲間から離れて行く人々のことを警告しています。そういう人たちがいることを伝えていて、彼らは「反キリストだ」と、偽預言者であることを明確に言っています。「2:18-19 幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であると分かります。彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためだったのです。」

その知識というものやらによって、キリストに留まる者たちの仲間を離れて行きます。これは実際に起こっていたのでしょうか。それで、彼らは元々、仲間ではなかったと言っています。そして、イエスがキリストであることを否定するもの、イエスを告白しない霊は、神からのものではなく、反キリストの霊であるということを話していきます。

そして、このことと兄弟を憎むに対する警告もヨハネは多く語っています。世において愛が冷えるのが世の終わりのしるしですが、教会の中にさえ、敬虔を装いながらその実を否定する者たちが出てくるということです。知識によって高ぶり、生活には実が結ばれておらず、キリストの教会から離れて行き、自分たちこそが神に近いのだとする、そこには兄弟を愛していないという問題があるのです。「4:20 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。」先ほどの、肉体やリアルの話なのですが、目に見える兄弟がそこにおいて、その人を憎むのであれば、ましてや目に見え

ない神は愛しておらず、神を愛していると言っているその言葉は偽りであるということです。

このようにして、ヨハネは、偽りに対して警戒させながら、キリスト者が初めに聞いて得た確信に留まり、その教えの中に留まることを教えていきます。そしてそういった人々は、永遠のいのちを持っているのだよ、喜びがそこに溢れているのだよと確信と保障を与えているのです。考えても見れば、90年代において、イエスを目撃した人はほとんどおらずヨハネぐらいになっていて、そして、キリスト教会がいろんな荒波を受けて入る時に、何を最後に残すのか？難しい話ではなく、単純な福音の真理だったのです。

2A キリスト者の歩み

最後に全体の流れをご紹介します。

1B 神と人との交わり 1:1-4

1章は、1-4節で手紙全体の始まりであります。「私たちの交わりは、御父と御子の交わり」なのだということを教えています。

2B 神の命令 1:5-2:6

そして5節から本題に入り、光の中に歩むこと、神の命令を守ることについて教えています。守っていないのに、神を知っているとは言えないということです。それが2章6節まで続きます。

3B 神と兄弟への愛 2:7-3:23

そしてヨハネは、福音書の13章でイエス様が新しい戒めとして教えられた、「互いに愛し合いなさい」という戒めについて語られます。また神を愛し、世を愛さないことについて話します。イエス様が、律法のまとめは、主なる神を愛し、隣人を自分自身のように愛することを教えました。ヨハネもずっと、兄弟を愛することを教えていきます。それが3章の終わり、23節まで続きます。

4B 御霊による内証 3:24-5:12

そして3章24節から5章12節までに、「御霊による証し」の話が始まります。御霊がおられるので、私たちが神のうちにいることが分かるということ。自分の生まれつきの知覚ではなく、御霊による証しによって、キリストの真理を知ることができています。それが5章12節まで続きます。

5B 永遠のいのち 5:13-21

そして5章13節から、最後のまとめで、永遠のいのちについてヨハネは語ります。いのちのことばから語り始め、イエスこそが永遠のいのちなのだということをしめくくります。大体の流れは、以上です。